



機械神アスラ

大原まり子

早川書房

(3/31刊・¥850)

前々から荒削りなパワーの作家ではないかと考えていたけれど、それを裏付けするような作品になっている。「パワー」といっても、ストーリーテリングでぐいぐい読ませるタイプ（概してアイデアは貧困）と、無数のモチーフを、一行ごとに惜しげもなくバラまくタイプとの二種類がある。コードウェイナー・スミスを原点の一つに置く大原まり子は、スミス同様後者に属する。解説では、ファッショナブルと表現されていたが、その単語から連想する、軽々とテクニクで書いていく雰囲気は、むしろ希薄だ。もっと骨太で、したたかな作家なのではあるまいか。ときどき短篇で見せるシブい幕切れにも、冷静な視点があるような気がする。本書は、基本的にイリヤ・セツ・ヘスと羅覇王という二人の人物の、ラヴストーリーである。ヴァーリイを思わせるヘスの生まれかわりと苦悩が、ラストの覇王との出会いに至るまで、神アスラのつむぐ運命の糸のままに描かれる。ただ、この長きにしては、人物の動きが煩雑だ。生かされなまままで、中途半端な人物が多すぎるのは、ちょっともったいない。できればもうあと一つ、モザイクを統べるテーマがほしい。(俊)